

## 一般 寄稿



看護学科

# 統合看護実習において成人看護学領域 の課題を選択した学生の学びと課題

友竹 千恵

Chie TOMOTAKE

看護学部看護学科専任講師

本島 茉那美

Manami MOTOJIM/

看護学部看護学科助教

高桑 優子

Yuko TAKAKUWA

看護学部看護学科専任講師

西出 久美

Kumi NISHIDE

看護学部看護学科助教

高橋 幸子

Sachiko TAKAHASHI

看護学部看護学科准教授

林 美奈子

Minako HAYASHI

看護学部看護学科教授



## 1 はじめに

統合看護実習は保健師助産師看護師学校養成所指定規則における統合分野「臨地実習 看護の統合と実践」<sup>1)</sup>の科目である。臨地実習の「看護の統合と実践」では基礎分野・専門分野で学んだ内容をより臨床実践に近い形

で学習することで、知識・技術が統合されることが求められている<sup>2)</sup>。

本学部の統合看護学実習は2単位の必修科目として、4年次5月の課題実習と9月の看護マネジメントにより構成されている。このうち課題実習は、学生が自身の興味・関心に沿い看護実践各領域（地域看護学領域を除く）より提示される21課題から1つを選択する。学生は提示された実習課題の中から自己の興味・関心に沿い、

第1希望から第3希望まで実習課題と自身が学習したい内容を具体的に記入し提出する。学生の希望を受け、学年全体での調整が行われた後、実習課題毎に学生3～5名のグループが決定され、学年全体に向けた実習オリエンテーションが実施される。学生は各自で選択した実習課題に関する学習課題を設定し、十分な事前学習を行い、実習を通じ学習目標の達成に向け取り組む。実習日数は臨地4日間と学内におけるまとめの1日である。実習最終日に、学年全体で実習施設毎に学びの発表会が開催される。

成人看護学領域における3年次までの学習は、健康段階に応じた医療施設内での看護実践能力の修得が主となっている。そこで、4年次の課題実習では、社会で生活している成人期の方への看護実践能力の育成と学びの拡大をねらい、3課題（5施設）での実習を展開している。

本稿では、成人看護学領域における課題実習の取り組みとして、まず、学生への学びの支援の実際について述べ、次に、学生の具体的な学びについて実習レポートの分析結果を基に報告し、最後に今後の課題について述べる。

## 2 成人看護学領域における課題実習の実際

### 1) 課題の概要

成人看護学における実習課題は「セルフマネジメント支援」「緩和ケア」「クリティカルケア」であり、「セルフマネジメント支援」「緩和ケア」はそれぞれ1施設、「クリティカルケア」は3施設で実習を行う（表1）。

### 2) 実習前オリエンテーションの実際

成人看護学領域においては、実習前に2回の領域オリエンテーションを行っている。1回目の領域オリエンテーションの目的は、各実習課題を担当する教員と学生3～5名との顔合わせと実習における学生各自の学習内容の明確化である。具体的には、学生－教員間や学生－学生間の関係構築をねらい、実習課題に関する討議を行う他、自己の学習課題と実習内容の関連づけを行うための事前学習課題の確認を行う。これらを通じ、学生は自己の学習内容の明確化を図る。2回目の領域オリエンテーションでは、成人看護学領域の実習課題を選択した約20名の学生が一同に会し、各自が学習課題の発表を行う。学生にとっては、学生相互に学び合う機会となるのと同時に、実習施設や実習課題の相違点に気づいたり、自己の課題の精錬化につながる機会となっている。医療

表1 成人看護学領域における課題実習の概要

実習課題	学生数	実習施設	ねらい
セルフマネジメント支援	5	医療施設の血液透析センター	透析療法を受けている成人期の（腎不全）患者とその家族への援助として、その人の生活パターンや服薬管理など、（入院・通院とわず）治療を受けながら日常生活のQOLの維持向上を目指す支援や指導の実際を学ぶ。
緩和ケア	5	医療施設のPCU（緩和ケア病棟）	苦痛を有する患者とその家族への援助として、薬物管理・使用の方法やQOLの向上のための他職種との連携など、具体的な援助の実際を学ぶ。
クリティカルケア①	3	医療施設のICU	生命維持最優先の治療室での援助として、医療機器の管理や生命の危機的状況にある患者とその家族への援助の実際を学ぶ。
クリティカルケア②	5	医療施設のCCU・救急外来	
クリティカルケア③	5	医療施設のICU	

施設における実習であっても、患者・家族と生活環境との関連性や構造等を関連づけて学びの広がりを持つことが出来るよう支援している。

### 3) 課題実習の実際

#### (1) セルフマネジメント

セルフマネジメント支援では、保存期腎不全で外来受診をする患者への看護師の指導場面の見学や、血液透析を受けている患者や家族へのインタビューなど、複数の患者・家族への関わりを通じ、その人のライフスタイルや価値観に合う看護を学ぶ。3年次まで病棟実習を経験した学生にとって、患者が日々の生活の中で自分に合う生活調整に取り組む姿に接することは、患者の状況に合う情報提供や信頼関係の構築の重要性を学ぶ機会となっている。血液透析に関わる医師や多職種からレクチャーを受けたり質問を行うことで、チーム医療の実際や、チームの一員としての自覚を学ぶ機会ともなっている。

#### (2) 緩和ケア

緩和ケアでは、苦痛を有する患者その家族への援助として、薬物管理・使用の方法やQOLの向上のための多職種との連携など具体的な援助の実際を学ぶ。特に終末期の苦痛を伴う症状に関する看護では3年次の成人看護学実習で学んだことをベースとして、患者が抱える症状に対して文献を用いて実際の患者の症状と照らし合わせ、どんなことが患者や家族にとっての苦痛なのかインタビューを行い、探索していき、効果的な看護について考察を深める。また、終末期患者の死生観や思いを知り、生きることの本質を探究するなど、患者の倫理的な問題までも実習のテーマとして取り上げており、価値観が異なる様々な患者家族へどう支援をしているのかの学びを得ている。終末期を過ごす場所についても病院と在宅の架け橋となる地域連携の必要性や患者家族への目に見える支援の方法について、緩和ケア外来や多職種連携のカンファレンスで学びを深めている。

#### (3) クリティカルケア

クリティカルケアでは、生命の危機的状況にある患者とその家族への援助の実際について、既習学習を踏まえ

て統合的に学ぶ。

救急外来（二次救急医療）では、救急隊・他施設・患者・家族等からの情報を受けての受け入れ準備や、受け入れ後のフィジカルアセスメント・一連の処置、家族への対応、他部門との連絡調整などを見学する。ICU・CCUでは、多種の医療機器に囲まれ治療を受ける患者やその家族への看護の実際を見学する。また、患者・家族へのインタビューを通じ、身体的側面だけでなく、精神的な支援の重要性についても学ぶ。

これらによって、学生は、クリティカルな状況下で床上安静や苦痛を伴う処置を余儀なくされる患者への安全や安楽についての考えを深めている。多岐にわたる知識と高度な技術に基づく看護の必要性の理解にもつながっている。

#### 4) 実習後のまとめ

実習最終日の午後に開催される学年全体の学びの発表会に向け、午前中に、成人看護学領域内での実習のまとめを行う。ここで学生は、自分の学びの内容を発表し合い、実習課題毎の違いと共通点という観点から考えを集約する。例年、実習課題毎に患者・家族の特徴や治療・看護の目的・特徴、チーム間の連携の特徴などを学生間で話し合った後、学生が捉えた3実習課題の共通点や相違点を集約している。教員は、学生個々の実習での学びの意味づけを促すと共に、発表内容の集約や資料作成を通して、学生から自発的に意見や疑問を述べ、目的に向かって互いに協力し合うという体験が出来るよう支援している。

## 3 成人看護学領域を選択した学生の学びについて

3課題を選択した4年次学生20名の実習レポートを対象に記述内容を質的記述的に分析した先行研究<sup>3)</sup>を基に、結果の概要を表2に提示した。学生は実習前に医療や看護に対し様々な〈興味・関心を抱き〉、実習により〈看護の捉え方の広がり〉を実感し、患者の抱える疾患が生活面や社会面に及ぼす影響を〈看護の視点で気づ

表2 成人看護学領域で統合看護実習を行った学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
学生が実習前に興味・関心を抱いたこと	医療や看護を受ける患者の思いとは 看護師は患者の状況をどのように把握するのか 看護師が行う援助の実際とは 家族のニーズを満たすための看護とは チーム医療や地域連携における看護師の役割とは 看護師をサポートする体制とは
実習による看護の捉え方の広がり	患者の状況を予測・判断し援助を行う 患者に負担をかけずに援助を行う 患者の安全を守る体制がある 患者・家族との信頼関係に基づき援助を行う 患者・家族の思いを尊重する 多職種で連携し合う 自身のストレスをコントロールする
看護の視点で気づいたこと	自分で自分のことを出来ない状況は患者にとって孤独で一番辛い 患者の生命の危機に直面した家族はどうしてよいかわからなくなる 患者の望むことの実現が回復意欲の向上へと結びつく 医療処置の一貫性を保つ必要がある 看護師の思いではなく患者の意向を尊重する必要がある 患者個別の状況に応じた援助が必要である 患者・家族のニーズを満たすための多職種間の連携が必要である
学生がイメージした看護のあるべき姿	患者の目線に立ち援助を行う 患者・看護師間の関係を良好に保つ 看護のチームとして力を発揮する 多職種の中で役割を遂行する 患者個別の生命・生活に即した援助を行う
学生が実感した看護への新たなアプローチ	自己の学習課題の達成状況を評価出来た 看護実践上の課題解決という思考の有用性に気づくことが出来た 今後の継続した学習の必要性が明確になった 専門職としての役割や責務が分かった

き)、これまでの学習を統合し、〈学生がイメージした看護のあるべき姿〉を描いていた。また、卒後あるべき自身の姿は〈学生が実感した看護への新たなアプローチ〉として述べられていた。どの学生も学習課題を達成するために学ぶことはできていたが、成人看護学領域における実習が学生の第一希望ではない学生の学びの深まりについては課題が残った。

## 4 まとめ

統合看護実習における学生への学びの支援は、〈学生がイメージした看護のあるべき姿〉や〈学生が実感した看護への新たなアプローチ〉のように、看護の捉え直しや、将来の看護者としての姿勢を調えるうえで効果があると考えられる。自分で見出した学習課題を、実習を通じて自分で解明するという方法は、学生にとって、自立した看護者となるための新たな学習スタイルを修得できる機

会にもなっている。

今後の課題は2点である。1点目は成人看護学領域における実習が学生の第一希望ではなかった学生や、学習意欲が十分でない学生への支援である。まず話を聞き、次に実習施設における医療や看護への理解を促し、学生が自身で学習課題を見出せるよう創意工夫を行っているが、相当の時間を要する現状がある。実習課題と学生の興味・関心との接点を探りつつ、学生個別の状況に応じた効果的な支援を行うために、引き続き、教員間での協力を図っていきたい。2点目は、地域包括ケアシステムの推進に対応しつつ、学生がこれまでの知識と技術を統合して学べるような工夫である。生活者としての患者・家族の姿から学びを広げることが出来るよう、看護実践各領域や実習施設との連携を深めていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省, 保健師助産師看護師学校指定規則 [インターネット]. (検索日 2017 年 8 月 27 日) <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26F03502001001.html>
- 2) 厚生労働省医政局看護課, 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 平成19年4月16日. [インターネット]. (検索日 2017 年 8 月 27 日) <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 3) 友竹千恵, 本島茉那美, 高桑優子他, 統合看護実習において成人看護学領域の課題を選択した学生の学びの様相, 第36回日本看護科学学会学術集会講演集, 2016年12月10日. PB-5-33.
- 4) 佐々木幾美, 西田朋子, 濱田悦子, 看護学総合実習に対する卒業生の評価, 日本赤十字看護大学紀要, 2008; 22: 49-60.